

伝説注意報

りょうへい書店

立花進-1 ～立ち止まる～

世界中は恐怖と脅威で溢れている。映画館支配人の立花進は次回の特集上映の企画に悩んでいた。ファミレスのドリンクバーの前で、空のグラスを持ったまま。

これまでに、〔元気が出る〕〔勇気が湧く〕〔思いきり笑える〕〔愛と平和〕をテーマにした。しかし、一般的に良いと思われていることに、正しいと思われていることに、映画の力を借りて人の気持ちを揺さぶることができるのだろうか。彼の戸惑いを埋める飲み物は、未だ見つからない。

先日、BSでたまたま『逃亡者』が放映されていた。逃げる行為は負の印象を連想させるけれど、映画の中でハリソン・フォードは逃げながらも立ち向かい、近づいていた。少なくとも、逃げているときは立ち止まっていなかった。

例えば、〔愛と平和〕。この大切さをアピールするときに‘素晴らしい’ことを言い続けるのではなく、逆に否定してみる。あえて非難してみることで、〔愛と平和〕の価値を違った角度から認識できるのではないだろうか。

そんなことを考えながら、迷った末に押したボタンはクリームソーダだった。人工的な緑色の液体が、泡とともにグラスに満たされる。

「よければ、今度、映画でも観に行かない？」

隣のテーブル席に座っている見知らぬ男女の会話が耳に入ってきた。顔は素朴であるけれど、健康的に陽に焼けている男子がそう言った。赤色で跳ね馬のマークがプリントされた長袖Tシャツを着ている。座っている姿勢からも体格の良さがわかる。

「観たい映画があるんですか？」

赤いミニスカートから堂々と美脚を放ち、‘クール’と‘無愛想’が入り交じった表情の女子が言った。女子高生が身の丈に合わない雰囲気醸し出そうとしているように見えなくもなかったけれど、年齢を推察するのが難しい女性だ。

「いや、特には無いんだけどね」

「何ですか、それ、変なの」

付き合っているカップルにしては会話がぎこちない。お互いが探り合いながら、言葉の森を歩いている。もしかすると、初めてのデートなのだろうか。そう考えると、二人の赤い洋服たちもどこかよそよそしい。示し合わせたというよりは、偶然に居合わせてしまったTシャツとミニスカートのようだ。会話を続けようと言の葉を探す男子に向けて、彼女が大きな杉の木に身を隠しながら丸い木の実を投げしてみる。

「私、ホラーとか戦争ものとかは苦手ですよ」

「ホラーと戦争ものはやめよう」

彼が即答する。

「あと、字幕もチョット。洋画なら吹き替えがいいな」

「吹き替えにしよう」

「洋画にするんですか？」

「いや、そういうわけじゃない。邦画もいいね」

「はっきりしないですね」

そんなお二人にお勧めの映画がございまして、と口を挟みたくなる。幽霊やゾンビも登場しないし、銃撃戦で血が流れることもない映画ですよ、出演している役者さんは地味ですが脚本がとってもいいんです、と。中盤の展開が、終盤であんなことになるなんて。立花の勝手な空想をよそに、赤い跳ね馬の男子が恥ずかしそうに、広い肩幅を縮めながら話出す。

「実はね、あそこの映画館に縁結びのうわさ話があつてさ。五番シアターのG-5席に意中の人を座らせて一緒に映画を観ると両思いになるっていう」

立花のボールペンを持つ手が止まる。と、言うよりも、少し前からそのボールペンは仕事をしていない。クリームソーダは少し減っている。白い泡が気付いたら消えてしまっているように、傍観者と当事者の境界線は本人が思っているよりも薄く破れやすい。そして、障子紙のような薄い膜に穴が開けられるのは、たいてい傍観者の席に座しているときだ。自分のものではないボールペンの先端が、鮮やかに小さく突き刺さる。微かに届く光には、その奥にある希望か絶望か分か

らない何かが包み込まれているにちがいない。赤いミニスカートの彼女も、目を細めながら彼の台詞の先端を探しているようだ。

「それを、先に言ったら」

どう返答してよいのやら、言われた彼女は言葉につまる。

「面目ない」

クリームソーダ、逃亡者、赤いミニスカート、縁結び。これらを結びつけると、どんな特集上映の企画案ができるのだろうか。

立花進は追いつめられたまま、立ち止まる。

就職活動の開始時期が年々、早まっている。経営学部三年生の富山輝一の周囲でも、少しずつ慌ただしさの波風が立ち始めていた。ゼミの同級生の会話の中でも、どこそこの会社説明会に行った行かないの話題が多くなってきた。しかし、彼はそのような風向きに乗ろうともせず、あるいは踏ん張って突き進もうともせず、上空の雲の行方を眺めながら立ち止まっている。

目を閉じているとひとつ強い風が吹いて、彼の前に一枚の紙切れが飛んできた。拾い上げてみると、白紙の履歴書だった。とは言え、これは彼の頭の中の話。実際には履歴書など空から舞い落ちるはずもなく、三時限目の教室で菓子パンを食べながら行政書士の勉強をしている。目を閉じたままの彼は、以前に書いた履歴書のことを思い出している。それは一年生のときから始めた学習塾のアルバイトまでさかのぼる。当時は趣味の欄に、音楽鑑賞だか読書だか当たり障りのないことを書いたと記憶している。今は、と趣味の欄で手が止まる。マーケティング、と書いてみたが、すぐに消した。やっていることは根も葉もない都市伝説をでっち上げてインターネットに書き込み、口コミ調査と称してその推移を調べている、本人すら悪趣味だと思っているけれど、面白いので仕方がない。面白いと言うといささか語弊があるのか。別の表現で言い換えるならば、社会に対する興味深さだ。何が社会を動かしているのか、と思ったところで社会の荒波に揉まれたことがない若造が偉そうに、と富山は自戒しつつ口元を緩める。

「また一人で昼飯を食べてるのか」

顔は素朴であるけれど、健康的に日に焼けている男子が近づいてきた、同じゼミの川合だった。富山は書きかけの履歴書を頭の引き出しにしまう。スポーツマンの川合は赤い帽子をかぶっている、額にはイタリアの有名な自動車メーカーのマークがプリントされている。

「昼飯はゆっくり静かに食べる主義だ」

「いつものあんパンだろ、それ」

話しながら、川合は開いているノートパソコンを覗き込もうとする。行政書士の勉強とは無関係な画面、彼が書き込みに利用している掲示板が映し出されていた。

「例のバイト先の女の子とデートに行ったんだろ。どうだったんだ？」

富山はディスプレイを少しだけ閉じ、彼の視線を逸らす話題をふる。見られてすぐに困る画面ではなかったけれど、どんなことでも気になることには質問してくる川合に覗かれるのは好ましくない。偽りの説明をするのに頭を働かせるのも億劫だった。

「どうもこうも、笑い話にもならないさ」

「何があった？」

「この前、ネットの掲示板で一緒に見たろ、あそこの映画館の縁結びのうわさ話」

「ああ、あれね」

「映画を観る前に話してしまった」

「手品をする前にネタばらしかよ」

「面目ない。いきなり、何か観たい映画でもあるのか、って聞いてきたもんだから」

「そりゃ、映画に誘われれば普通はそう尋ね返すだろ」

「で、最近、上映している映画は何だっけな、と思いついているうちに彼女からホラーと戦争ものは嫌だと言われて」

「ほう、どちらもお前の好きなジャンルだ」

「そう。で、会話が続かなくなって仕方なく」

「仕方なくで、種明かしか」

川合は豆乳飲料を買いに行くと言って、いったん教室を出て行った。富山はその隙に映画館の縁結びのうわさ話を検索する。新しい拡散の跡は見つからない。エクセルのファイルを開き、川合からバイト先の女の子へ伝えられた履歴をメモとして残した。こんな風にして、彼はあらゆる方法でうわさ話、口コミ、都市伝説を発信し、その経過を調べている。既に流布されているものを広げる場合もあるし、修正を加えることもある。そして、どのような形で自分の耳に戻ってくるのか、その期間の長さ、拡散のされ方、内容の歪曲性などをチェックしている。その流れの中で、彼の思惑に反して悪意の方向に進んでしまうこともある。何の根拠もない風評被害が、突然変異の新種のウィルスのように誕生してしまう。もう彼にはどうすることもできない。しかし、それも彼にとってはデータのひとつでしかない。社会の目

に見えない思惑の中で、身を委ねるのみである。まるで儉約に厳しい主婦が家計簿をつけるように、エクセルのファイルに無益でもあり有害でもある情報が書き込まれていく。彼が上書き保存のボタンを押すときに、戸惑いは指先には微塵もあらわれない。

殿町和江-1 ～泣けない～

「こんばんは」

先に声をかけてきたのは、諏訪雪美だった。殿町和江は専用のタオルで、エアロバイクのサドルやハンドルを拭いていた。八台あるエアロバイクを漕いでいる人は三名、今晚はいつもより空いている。ワールドカップへの出場がかかっているサッカー日本代表の試合が、テレビで放送されているから皆それを見ているのかもしれない。和江はサッカーに興味がないから、試合の結果にいちいち一喜一憂する気持ちがよく分からない。そもそも、特に好きな競技があるわけでもないのに、スポーツジムでアルバイトしているなんてどうなんだろう、と思ったりする。実家からの仕送りだけで生活費を切り詰めれば、やっていけないことはないけれど、それでは好きな旅行もままならない。それにスポーツジムであれば、運動不足の解消にもつながるだろう程度の気持ちではじめて二ヶ月が経った。

「こんばんは」

雪美はさっきより少し大きめの声で、一步前に近づいて声をかけてきた。

「はい」

と、和江はトマトをこっそり盗もうと、畑に忍び込んだところを呼び止められた子供のような返事をした。思っていたよりも大きな声が出て、何人かがこちらを振り向いた。

「こんばんは、和江ちゃん。先日はお店に来てくれてありがとう」

雪美はタオルで額に浮かぶ汗を拭きながら、ファミレスで接したときとは違う笑顔を見せてくれる。親しみの質がちがうような、物理的な距離間は同じでも気持ちの距離感に差があるのだろうか。彼女はエアロバイク中級者向け教室を終えたばかりのようだ。教室からぞろぞろと出てくる女性陣の多くは、彼女と同じように未だ息が荒い。

「こんばんは、雪美さん。この間は、何かそっけない感じでした」

「そう？いつもと同じだったよ」

「そうですか」

和江は自分の愛想のなさに少し落ち込む。

「普段からあんな短いスカート穿くの？」

「いつもではないですけど、たまには穿きます」

「川合くん聞いたけど、初めてのデートだったんでしょ」

「一応そうですね。先輩の誘いを何度も断るのは、悪いかと思います」

「同情デートか。それなのにあんな刺激的な服装するなんて、和江ちゃんも意地が悪い」

「そんなつもりは」

「いや、彼に対してはそれくらいの態度でかまわない。すぐに調子に乗るから。で、デートした感想は？」

「感想ですか。悪い人ではないと思いましたが、ちょっと話題が難しかったり」

「また、自転車の話？」

「それもありません。あと、トライアスロンの話とか」

「はいはい、結局、スポーツの話ばかりと言うわけか」

「一瞬、映画の話になりかけたんですが」

「それは珍しい」

「けど、わたしの返し方が悪かったのか、あまりその話題では続かなくて」

「昔に比べれば進歩したな」

「雪美さんは、川合さんのこと詳しいんですね？」

「昔、付き合ってたからね」

「そうなんですか？！」

また、大きな声をあげてしまった。苦手な社員さんの冷やかな視線を感じた。

「嘘。ごめんごめん。でも、デートじゃないけど二人で買い物に出かけたり、女の子を紹介したこともあるよ」

雪美は百貨店で働いてる女性がよく使うような透明なビニールバッグの中からペットボトルを取り出し、勇ましく飲みあげる。和江は目の前の彼女と、ファミレスで働く彼女の姿を見比べながら、同一人物かどうかの整合性を調べ、共通点を探そうとするもなかなか見つからない。大人になるという意味は、自分自身を使い分ける幅の広がりのことを指すのだ

ろうか、とってしまう。自然体に生きるということは、自由な自分を生きるということではなく、どんな環境でも適応して生きることなのだろう、と和江は雪美と接するたびに感じてしまう。氷河期と温暖化を繰り返していると言われる地球で、人類が誕生する以前から生きている動物や植物のしたたかな進化の揺れみたいなものだ。

おそらく、若い頃の祖母はそれがうまく出来なかったのだろう。己を変えようとはせず、周囲の人間に変化を求めてきた祖母が残していた最後の手紙は、その人生の中での後悔がいくつか綴られていたものの、死後のお願い事も他人に委ねるものだった。例え病室の住人になっても、もっと努力して出来たことはあったろうに。和江は葬式で遺影に写る祖母の顔にそう無言で呟いた。彼女は祖母が亡くなり、通夜と葬儀に参列し、燃やされてどの部分の骨だったのかも定かにならない姿になった祖母に対面しても、一度も泣くことはなかった。涙が自然に頬を伝うことはなかった。おばあちゃん、と純粹に可愛らしく呼びかけられていたのはいつ頃までだったのだろうか、和江はもう覚えていなかった。

立花進-2 ～グーニーズ世代～

毎日の上映作品の始まる時間を決める仕事は、売上に直結するだけではなく現場のオペレーションにも深く影響する。人気作品の開始時間を立て続けにしてしまったら、チケット売り場もロビー也大混雑してしまう。また時間帯などでは配給会社の顔色を窺わなければならないときもある。自分の好みではない映画を一日に四回も五回も上映しなくては行けないなんて、大人の事情というやつである。みんなのための妥協、それは正しい判断だと誰かが言ったとか言わないとか。

例外的な場合もあるけれど、たいてい映画の公開日は土曜日になることが多い。そのため、土日の興行成績の結果から、月曜日に翌週からの上映時間を決めている。前評判の高かった作品が思いのほか奮わなかったり、逆に期待していなかった作品が予想以上に当たることも珍しくない。五月から公開されている刑事もののテレビドラマの映画版が、一ヶ月を過ぎたというのになかなか大きく落ち込まない。業界人の予想なんて、天気予報よりも当たる確率が低い。

次週からの上映時間が落ち着き、缶コーヒーを飲みながら一息ついているところを後輩社員の大森が声をかけてくる。立花を覆っていた、薄い集中力というシャボン玉の膜が弾けたのが見えたのだろう。トランシーバーから聞こえてくる、現場のスタッフの働く声も一回り大きく耳に入るようになった気がする。

「支配人、『インディ・ジョーンズ』は観ましたか？」

「まだだよ。完成披露を見逃してしまったから。公開しちゃうと、タイミングがなくなるね」

「そうですか。大きいスクリーンのうちに観られるといいですね」

「だね。で、どうだった？出来のほどは」

「面白かったですけど、やっぱり僕は二作目が好きです。八十年代半ばは名作揃いですから」

「そうだけ、パッと思い出せないな」

「『魔宮の伝説』は八十四年の公開ですけど、同じ年には『グレムリン』、『ゴーストバスターズ』があります。そして、八十五年には『ネバーエンディング・ストーリー』、『ターミネーター』、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』、『グーニーズ』があります」

「名作の、しかも一作目ばかりだ。でも、リアルタイムでは観てないでしょ？」

「『ネバーエンディング・ストーリー』と『グーニーズ』は、父親に連れて行かれましたけど、ほとんど覚えていません。五歳児に字幕の映画は早熟だったようです」

「そりゃ、そうだ」

「どうやってか、このあたりの作品を特集上映でやれたらいいんですけど」

「それは難しいかもね。シリーズものなら全作品として交渉はできるだろうけど、有名すぎるからね。ストーリーが浸透しているから、映画館でもう一度観たいと思ってもらえるかどうか」

「そこが難しいんですよ。今流行りのファンタジー映画で育っている世代には、観てもらえると嬉しいんですけど。個人的な感想ですけど、今のファンタジー映画って本当にファンタジーで、正にちがう世界の話。もう、アドベンチャーなんてジャンルは死語かもしれませんが、八十年代の映画には現実的にあるかもしれないという気分が漂っていました。実在の人物として、インディ・ジョーンズを感じる事ができたみたいだな」

「CG映像や撮影技術の進歩が、皮肉にもそういう事態を招いたかもしれないね」

「それも一理あると思います。でも、もっと大きな要因としては、いつ頃からちゃんと調べてはいないんですけど、映画がエンターテイメントなんて呼ばれ出してから現実とズレ始めてしまっ

たんじゃないかと思っています」

「どういうこと？」

「お客さんを楽ませることが、刺激を与えることと同じ意味になってしまったと言うか。昔の作品は、登場人物も映画自体もしっかりと地に足がついていたような気がするんです」

「簡単に人間が空を飛ばない、みたいな」

「まあ、そんな感じかもしれません」

「でも、今のファンタジー映画も原作は古かったりするけどね」

「そうですね。内容は同じでも、文学と映画ではインパクトが変わってしまうんでしょうか」

人は人の力だけでは空を飛ばないし、死んでしまった人間は生き返らない。宇宙人はいるかもしれないけれど、猫と会話することはできない。念力が使える超能力者はいるかもしれないけれど、誰もが眠らないわけにはいかない。

シネコンが乱立する戦国時代に突入し、どの映画館でもだいたい同じ作品がかかっている。そんな状況の中で、定期的な特集上映は映画館の個性を打ち出す突破口の一つになるだろうと、立花は考えている。お皿にどのメニューを盛るかはお客さんに委ねられているバイキング形式であるものの、テーブルの隅にひとつくらいはこだわりの食材を使った料理を置いておきたい。たとえ自己満足と言われようとも。

「ところで、大森くんはうちの映画館に何だか縁結びのうわさ話だか、都市伝説だかがあるのは知ってる？」

「それは、あれですね。五番劇場のことですね」

「それって、有名なの？おれはついこの間、耳にしてね。いつ頃から、そんな話があるの？」

「そんなに前ではなかったと思います。映写スタッフの山口くんが新しくアルバイトで入った池田さんが気になると休憩室で話しているときに、別の誰かがそれなら一緒に五番劇場で映画を見ればいいよと言っていたときだから、春休み前くらいでしょうか」

「あの二人、付き合っているのか？」

「あれ、支配人、もしかして池田さんのことタイプでしたか？」

「うん、タイプ。いや、そんな話はどうでもいい」

「いや、支配人の権力を使えば何とかかなりますよ。支配人秘書にしてみまうとか」

「いいね、それ。じゃ、ないよ。そんなことしたら、早々に辞められてしまうわ」

「時給を他のスタッフには内緒で、こっそり上げてあげるとか」

「その手があった。って、もう悪魔の囁きは止めておくれ」

「はいはい。ただ、二人が付き合うことになったのは、五番劇場の奇跡が功を奏したかどうかは分かりませんね。もともと山口くん、ナイスガイですから。そんなことよりも、そろそろお昼のお弁当を注文しませんか？」

ショッピングモールの施設全体の設備関係を統括している防災センターには、神棚が供えつけられている。そこに祀られているのは恵比寿様。理由を尋ねてみると、商売繁盛と除災招福のご利益があるからだそうだ。空調設備点検の申請書や時間外警備の依頼書やらで、防災センターに

立ち寄ることは少なくない。その度に“えべっさん”が鎮座しているであろう神棚を見上げるものの、何かをお願いしようという気持ちにはならない。あまりにチラ見をするものだから、センター長からはどんな願掛けをしているのかと問いつめられたこともある。

立花自身は信心深い人間ではないと、少なくとも本人はそう認識している。先祖の供養くらいはしないといけないだろうと思っているけれど、実家を離れ、転勤のある仕事に就き、休日も不規則な状況ではお盆に帰省して墓参り、ということすら毎年できていない。名前と役割が立派な神様よりも、実際に生きてきた人間に手を合わせることの方が、彼の中では理に適い納得できる。

しかしながら、信心深さと非科学事象の関係性について問い直してみると、これまでの特集上映で扱ってきた作品群は、目に見えないものの大切さや尊さを伝えるものばかりであったことに気がつく。宗教であれイデオロギーであれ経済活動であれ、何を信じるか信じないかは命ある者の自由である。はじめは清い心持ちであっても、信じ始めるとそれが本人にとって普遍的で絶対的なものとなり、理屈の壁が崩れさることがある。一方通行の悪夢である。ちっぽけな個人の理屈なんて不要だ、と多勢の渦に巻き込まれると、それは上るたびに足場が消えていく階段のようなものかもしれない。引き返す手段がどこにあるというのか。

立花は目に見えないものに対峙するとき、つい慎重になってしまう。目の前の百円玉が本物の百円玉からすら疑ってしまう気分になることもある。人の輪に入ることが苦手なもの、きっとそんな性格のせいだと彼は拡大解釈をしているようだ。遠くの方から彼には聞こえない声が届く。いや、それはあなた自身のまだ自覚していない別の理由が原因ですよ、と立花の後ろに憑いている神様が空笑いをしていた。

帰り支度を整え、富山は重たい鉄扉を開ける。小柄な女の子は、体ごと押し込んで入室してくるほどだ。学習塾の入っている建物は、雑居ビルというジャンルで呼んでも差し支えなかった。しかも、駐輪場は裏通りに面している。道を一本はずれるだけで、こんなにも体感温度に違いが出るなんて、現代の夜の町は不思議に満ちあふれている。富山はグレイのチノパンのポケットに手を入れて、原付の鍵を取り出そうとする。

「センサー」

暗闇から急に声を掛けられ、富山は無意識に体を強張らせた。ここはネオン煌めく眠らない町ではなかったが、危険が皆無な地域でもない。そのような場所は、そもそも日本には存在しないはずだ。富山はカバンの中に戦える武器があるかどうか思い浮かべる。鈍器と呼べるのは空の水筒くらいなものだ。そんな彼の妄想をよそにスタスタと近づいてきた人物は、つい数十分前まで一緒にいた少年だった。

「なんだよ。びっくりさせるなよ。そんな所に隠れて何してる？」

駐輪場の奥のゴミ捨て場から姿を見せたのは、富山の生徒の一人である仁摩猛である。中学三年生の彼は、自分から呼びかけたものの、目を合わせようとはせず、話し振りに緊張感が漂っている。話をしたいのに、うまく言葉が続けられないようだ。元々、お喋りなタイプではないけれど、年齢の割には聡明な話し方をする少年で、今の彼にはその面影が少し薄れているようだった。

「どうした？」

富山はもう一度、声をかける。ポケットの中で手にしていた原付の鍵を離す。どこか話がしやすいところに移るか、近くにあるファストフード店に入ることにした。時刻は二十一時半を過ぎているのに、店内の八割ほどの席は埋まっている。二人は禁煙側のテーブル席が空いていなかったため、窓際のカウンター席に並んで座った。富山の隣には会社帰りと思いき若いサラリーマンが、テーブルに突っ伏してスヤスヤ寝ている。真新しいファイナンシャルプランナーの参考書が、布団から投げ出された枕のように転がっている。こんな所で眠りこけていないで早く家に帰ればいいのに、と遠いようで近い自分の将来像に見知らぬサラリーマンの寝息を重ね合わせる。

お互いそこまで空腹ではなかったので、フライドポテトのLサイズを注文し、富山はアイステイーを、仁摩猛はオレンジジュースを頼んだ。もちろん支払いは富山がもった。席に着くと、しばらく無言のままフライドポテトを食べ、ドリンクを飲むという動作だけが目前の二階のガラス窓に写っていた。覗き込む眼下には、歩道を行き交う人々の姿が見える。こんなに明るい店内で熟睡している人もいれば、薄暗い夜道の中をもしかするとこれから仕事に向かう途中の人もいるかもしれない。

「志望高校を変えたいと思っています」

臨時ニュースに切り替わるテレビ画面のように前触れもなく彼は話し始めた。仁摩猛は県内の公立進学校も十分に狙える学力レベルを備えている。名門私立大学の付属高校も狙いにきたのか

、と富山は勝手に考えた。中学一年の時から、つまり富山が学習塾のアルバイトを始めたときから受け持っている生徒で、既にその頃からよく出来た子だった。

「私立は授業料が少し高いけど、付属高校なら大学への道も大きく開けるだろうからいいんじゃないか」

と、先読みをして答えたつもりだった。周囲の期待に応える決意をしてくれたのだろう、と考えた。

「いえ、すみません、あの付属高校を受験したいのではないです。実は、自動車科のある高校に進学したいと思っています」

富山のフライドポテトを食べる手が、一時的に停止した。突然の天気雨に遭遇した人が、干したままの洗濯物で頭がいっぱいになり青信号に切り替わったのを見逃すように。そして、後続車からのクラクションで時間は再生される。

「富山センセー？」

彼はあまり冗談を言う子ではない、少なくとも富山の知るかぎりにおいては。あらためて彼の表情を見る。悪ふざけで話しているとも感じられない。

「自動車の整備士になりたいの？」

一歩半くらい遅れて、そう答えた。富山の乏しい知識では、自動車科イコール自動車整備士しか思い浮かばなかった。突然の展開に動揺しているのが、自分でも分かる。動揺は、彼の最も嫌うところの心理状態である。

「まだ、今のところは整備士になりたいというわけではないですが、車に関わる仕事がしたいと思っているんです」

「そう。両親には話したの？」

「まだです」

「学校の先生には？」

「それも、まだです」

「じゃ、なんで俺なんかに相談するの？」

「それは、身近で相談ができる大人で思い浮かんだのが、富山センセーだったから」

仁摩猛が自動車科のある高校に進学したい、という告白は富山にとって予想外であったけれど、それ以上に彼の動揺の風船を大きく膨らませたのは大人認識発言であった。世の常識から見れば、中学三年生にとって二十歳の大学生は大人であるにちがいない。酒も煙草も認められるし、結婚は既にできるが、新しく選挙の権利と年金の義務を負う。本人が望もうが望むまいが、社会の一員としての責任を押し付けられる。学習塾ではセンセーなんて呼ばれているけれど、学生気分にとっぴりと浸かっていることを否定できない。自分で自分の生活費をすべて賄えていないのだから、それは大人とは呼べない。しかし、大人の階段を登りきっていないにも関わらず、あなたはもう大人でしょ、という事実を突きつけられる場面にたびたび遭遇する。そして、動揺する。

ともかくにも、富山は選ばれたのである。少年の最初の相談相手として。友達感覚の回答ではなく、大人の意見として解答を。十四歳が十五歳の誕生日をどのように迎えれば良いのかとい

うことを。

「と、言うわけさ」

講義が終わったあとで、富山は川合を呼び止め学食に向かった。ランチタイムはとっくに過ぎていたものの、食堂内の騒がしさは収まる気配がなかった。昼間は学生食堂で騒ぎ、夜は居酒屋とカラオケボックスで‘どんちゃん’延長戦。

「お前から相談したいことがあるなんて言うから、どんな話しかと思ったら塾の生徒さんのことか」

富山は仁摩猛に対して、これと言ったアドバイスができなかった。来週までに自分も自動車科のある高校については調べておくよ、と言い残すくらいしかできなかった。

「どう、思う？」

「どう、って言われてもな。会って話してみないと分からないよ」

「そうか」

「なんだ、会わせてくれないのか？」

「会ってくれるのか？」

「富山の頼みとあれば、断れないだろ」

別にそこまでは頼んでいない、と言いかけたところで今回は自分の気持ちをスルーした。それにしても、よりによって川合に相談してしまうとは、自分の交友関係の狭さをこんな場面で痛感してしまう。反して、脳内の異なる痛感帯では、川合なら仁摩猛にとっては有益なアドバイスが出来るのではないか、という期待度数が高まっている。近いうちに日程と場所の連絡をすると約束し、騒々しい人だまりから逃げ出した。

殿町家の墓所は小田原市の駅から程遠くない寺内に立てられている。しかしながら、現在の和江の実家は愛知県下にあり、ここには滅多に来ることはない。この四月から東京の大学に進学したけれど、一人で墓参りに行く風習なんて彼女の中には存在していなかったもので、キクさんから祖母の墓参りをしたいと申し出があったときには、正直ラッキーだと不謹慎ながら思ってしまった。葬式以来の再会にはなるけれど、場所がうろ覚えで迷わずにお墓にたどり着けるように、線香を上げる前なのに祈り始めている。

七月はじめの土曜日、すっかり夏の幕があがりきったアスファルトの舞台の上で、予想外にも快く運転を了解してくれた雪美とともに、駅前のロータリーでキクさんの到着を待っている。移動のための交通費を何とか節約できないだろうかと考えていたものの、和江的にはまだそこまで親しくはなっていないと思い込んでいる相手に頼むべき話であるかの半信半疑になってはいたけれど、雪美なら呆れたりしないで聞いてくれるのではないかと、脳内の普段は使われていない回路のひとつが小さな音をたてて反応していた。雪美は、「へえ～、そんなことしているの、すごいね」と言い、「小田原なんて久しぶりだあ」と言い、「次に行くときは小田急のロマンスカーに乗りたいね」と言った。

「はじめまして、殿町和江です」

改札口から現れたキクさんに声をかけた。彼女は祖母よりも五歳年下なので、七十歳くらいであるはずだけれど、力強い眼差しはまだまだ人生からの引退なんてしないわよ、と無言のアピールをしていた。

「はじめまして、あら、お友達も一緒だったの。これ、自家製の梅干し。あなた、良ければ、あとで住所を教えなさいな。贈ってあげるから」

と、自己紹介もそこそこに車の停めてある場所まで背筋を意識的にのばして、姿勢よく歩いていく。車中では雪美もいることから、和江はどこからどこまでキクさんから話を聞けばいいのだろうか迷って口をつぐんでしまっていると、そんな不穏な低気圧の発生もお構いなしに、つまりは和江の心配をよそにキクさんと雪美は又力漬けの話題で盛り上がっている。後部座席にひとり座る和江は、場違いな相席のタクシーに乗り合わせてしまったみたいだった。

「和江ちゃん、次の信号を右でいいの？」

雪美に声をかけられ、同じ班の修学旅行の一員として忘れられていないことにホッとする。

「はい。次の信号を右折です。そしたら、そのまま道なりに少し走って、左手に美容院が見えてくるので、その先の交差点を左折してください」

車内がしばし静かになる。キクさんは車外に目をやり、流れてゆくガラス越しの風景を追いかけているようだった。和江も同じように車窓から外を眺める。こうして、キクさんに出会えることになったのは、源蔵さんのおかげであった。祖母の遺言を頼りに、最初に会った人である。彼がキクさんの所在を調べて連絡をつけてくれた。源蔵さんから事のあらましを聞くと、キクさんは彼女宛の祖母からの手紙をまずは読ませて欲しいとお願いしてきた。直接会って手渡ししたか

ったけれど、わざわざ茨城県にまで来る必要はないと諭され、そのかわりに祖母のお墓まで案内してほしいと言われた。いったい、そこに何が書かれてあったのか、今はまだ和江には知る由もない。祖母とキクさんの出会いは戦争の時代にさかのぼる。祖母は学童疎開として茨城県へ移った。キクさんの通う小学校に。二人は学年は離れていたが家が近くであり、間を置かずに仲良くなった。一ヶ月もすると、知らない人間が見れば姉妹と間違えられるときもあったらしい。終戦を迎えると祖母は東京に帰った。幸いにも生家は空襲から免れて、住むには困らなかった。住むには困らなかった、と言うのが精一杯の慰めだった。東京という町の呼び名は同じであっても、それはもう東京ではなかった。東京として存在していた東京は、祖母が学童疎開をしている間に歴史の塵の山に放り込まれてしまった。戦争中の話はしたがらなかった祖母も、戦後の復興に向かう日本の話はたまにしてくれた。まだ幼いながらも、日本の歴史が大きく回り始める、その渦中にある空気の匂いがしていたと話してくれた。祖母は子供のころに、彼女のおばあさんから聞かされた武士の世が終わった日本のことを思い出したという。身の回りに実在していた、終焉とともに終わる人、終焉に抗う人、終焉から新しく生まれ変わる人たちのことを目にしながら。

お墓に到着すると、三人で墓石をきれいにした。用意してきた花を生けた。そして、キクさんが鞆から缶コーヒーを取り出してお供えをした。

「祖母は缶コーヒーが好きだったんですか？」

「缶コーヒーってわけではないけど、コーヒーは好きだったわよ。私の記憶の中では、だけど」

和江の記憶の中では、祖母が好んでコーヒーを飲んでいて印象は薄かった。年齢とともに飲まなくなってしまったのだろうか。雪美も几帳面に線香をあげて、三人は思い思いの短い会話を祖母としたのだろう、車に戻るまでの数分間、和江は「それにしても暑いですね」と言い、雪美が「だって、夏だからね」と答えた。キクさんは、無言のままであった。

三人は昼食をとるため、丼ものが美味しいと評判の老舗の店に入った。席に着くと、キクさんは鞆の中から茶封筒を取り出す。キクさんの鞆からは色々なものが飛び出してくる。その封筒の中には白黒写真が数枚、封入されていた。どこかに旅行に行ったときの写真のようだ。

「二人で湯布院に温泉旅行に行ったときの写真よ。私がまだ二十歳そこそこの頃だから、彼女は二十五歳くらいの時だね」

和江はその古い写真の中の、若い祖母の顔を新鮮な気持ちで眺めていた。亡き祖母の同窓会プロジェクトの大枠を、源蔵さんに宛てられた手紙を拝借して読んだときに、それが和江自身の人間としての成長のためであると、祖母は心情を吐露していた。世界は理不尽でできている、そんな言葉を祖母は時おり口にした。子供の頃に戦時体験をした彼女は、そのことを身にしみていたに違いない。ただ、幼い和江にはその意味がよく分からなかった。もし、質問ができるのならば、その理不尽は何から生まれるの、と聞いてみたい。祖母はどう答えるだろうか。理不尽は組織の中から生まれる、なんて言うかもしれない。

そうしたら、この同窓会プロジェクトなんて可愛らしい冗談に満ちた理不尽にすぎないのかもしれない。ささやかな幸せを呼ぶかもしれない迷惑な遺言。祖母が孫娘に見せたい、世界の成り立ちの果て、あるいは始まりにあるものについて。やっぱり理不尽、なもののなのかどうかを和江

自身に知ってもらうために。

和江は手にしている同窓会名簿に目をやる。そこには十二名の名前が書かれてある。これまでのところ実際に会うことができたのは、源蔵さんとキクさんの二人だけ。源蔵さんネットワークの情報から、他の人たちの現状も少しずつ分かりつつある。残念ながら既に亡くなっていた人もいるし、病院や介護施設に入っている人もいる。

「で、和江さんはこれからどうするつもりなの？」

キクさんは食後の熱いお茶をすすりながら聞いてくる。雪美は湯のみが熱くて持ち上げることに苦戦している。

「私は最後まで付き合うよ」

と、和江が答える前に雪美が返事をする。

「どんな結果になるか分かりませんが、出来るところまでは続けたいと思っています」

「そうそう、途中で投げ出したらよくないよ」

雪美が発言に被せてくる。確かに彼女の言う通り、始めたことを中途半端な形で終わらせたくはない。しかし、そんな感情以上に祖母の人生を辿ることに興味を持ち始めている。葬式の会場では、祖母の死に涙ひとつ浮かべなかったというのに。

「中途半端は嫌い、か。和江さんのおばあさんもそんな性格だったわ」

「そうでしたか？」

「そうよ。だって、考えてもごらんさない。もう死んでるのにこうしてあなたの成長やら人生に口を挟んでいるのだから。中途半端は嫌いというより、ただのしつこいおばあさんね」

和江は、誰かから祖母に似ているなんて初めて言われたことに眩しい驚きを感じ、家族というのは生きていようが死んでいようが、いつまで経っても付いて回るものなんだろうと思った。